様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０３２１６

研究課題名（和文）民族の名乗りと実践の現代的変容に関する民族誌的再検討―ランと国家制度、言説、移住

研究課題名（英文）An Ethnographic Study on Contemporary transformation of "Ethnic" Discourse and Practice: Rang, Nation-States, Migration

研究代表者
名和　克郎（Nawa, Katsuo）

東京大学・東洋文化研究所・教授

研究者番号：３０３２３６３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、極西部ネパールからインド、ウッタラーカンド州のヒマラヤ地域に住み、自言語による集団範疇「ラン」を共有する人々が、ほぼ 2 世紀にわたる国境による分断、グローバルに流通する概念の影響、国家政策の変遷、多くの成員の国内外各地への移住といった状況の中で、各々の生活世界との関係において、いかに、どのような文脈で 「ラン」として、或いは他の集団範疇の一員として生きるのかを、民族誌的に明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、20世紀半ばから21世紀に至る、国境によって分断された「民族」の動態を具体的に解明するものであり、その成果は、先行研究の乏しい、極西部ネパールからインドのウッタラーカンド州東部のヒマラヤ地域を故地とする人々の社会的文化的動態の記録と分析に止まらず、民族論、集団範疇論、国民国家論、グローバル化論等が交錯する現代的状況の解明のための、一つの重要な民族誌的手掛かりを呈示するものとなろう。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I studied how members of an "ethnic group" have lived their ethnic identity within their lived worlds, in relation to international border, minority policies of the two nation states (Nepal and India), globally circulating concepts (such as "indigenous people"), and experiences of domestic and international migration. The focus of the study is the people whose home villages lie in several Himalayan regions in Far Western Nepal and Uttarakhand, India, and who call themselves "Rang(-mang)" in their own mother tongue.

研究分野：文化人類学

キーワード：マイノリティ　民族　先住民　南アジア　国民国家　ネパール

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

「民族」の問題が「名」の問題に帰着するという議論は 1990 年前後から有力となり（内堀 1989 等）、筆者もかつてそうした議論の一翼を担ったことがある（名和 1992）。筆者はこの議論は現在でも有効だと考えるが、その後の人類学及び周辺諸学の議論の展開により、検討すべき幾つかの重要な課題が生じている。

第 1 に、「民族」という概念の曖昧さという問題がある。「民族」及びそれにほぼ相当する諸範疇の自明視に対する批判は以前から断続的に行われて来ており（Moerman 1968 等）、自民族と他民族を明確に区別する思考と所謂「近代性」との連関が指摘されてからも久しい。加えて、民族を含む集団及び集団性に関する人類学的な再検討（河合編 2009, 2013 等）、及び中間集団論の再登場（真島 2006 等）は、「民族論」を「民族」論と呼ぶ根拠の問い直しを強く要請するものとなっている。

第 2 に、特定の民族の「名」に結びつくものとして持ち出される、自分達の生活世界に根を持つ何らかの「客観的」な特徴が、「名」の内実との不整合を起こしうるという問題が指摘出来る。

以上の原理的な問題に加え、第 3 に、現代社会における「民族」の問題を考察する際には、国民国家と「民族」に関する一連の問題の再考が不可欠である。この次元では、リベラルな国民国家 におけるマイノリティの権利問題（キムリッカ 2012 等）といった理論的な問題系の検討を、地域及び国家が持つ固有の歴史的経緯と結び付けて行うことが要請される。例えばインドでは「カースト」「トライブ」といった植民地起源の概念が人々の生活に直結する形で法的に存続してきたが、1980 年代以降これらが新たな形で激しく問題化されている。他方、ヒンドゥー王国であったネパールでは、多民族性が公式に認められた 1990 年以降国内の様々 な少数者を巡る運動が活発化し、ポスト内戦期には「包摂」という概念と結びつきつつ、現在に 至るまで国内における最も主要な争点の一つとなっている。

第 4 に、グローバルに流通する概念による問題系の変容が指摘出来る。上記の「包摂」はその典型的な例である。また 1990 年代以降、「先住民」概念の流通の急速な拡大が、運動体のみならず「先住民」を自称する人々自身の言説と生活にインパクトを与えている（窪田・野林編 2009 等）。なお、こうした問題について具体的に議論する際にも国家というアクターは決定的な重要性を持つ。

第 5 に、人や財の移動の増加と高速化、また情報技術の急速な進展等は、「我々○○人」という想像の内実に実質的な影響を及ぼしている。エスニシティの商業化を巡る議論（Comaroff and Comaroff 2009 等）はその一面を照射するが、部分的な議論に止まる。

以上の論点は、原理的にはそれぞれ別個に論じられるべき問題であるが、現実には一つの状況の中に、複雑に絡みあった形で同在することが予想される。そこで、一つの民族誌的な事例を取り上げ、中期的なタイムスパンの中で多面的に分析することが、より包括性の高い理論的展開のための基礎作業として要請されるものと考え、本計画を立案した

２．研究の目的

本研究は極西部ネパールからインド、ウッタラーカンド州のヒマラヤ地域に住み、自言語による集団範疇「ラン」を共有する人々に焦点をあて、広義の「民族」を巡る複数の問題系を一つの民族誌的状況の中で統合的に検討することを目指すものである。インド、ネパール両国に別々に存在するランの民族団体の活動、及び、とりわけネパールのランの間で盛んになった海外移住の影響をも視野に入れつつ、従来「民族」の問題として論じられてきた諸問題が、特定の人々の間で具体的な形でいかに現れているかを、一つの民族誌として、提示することが、最終的な目的である。

３．研究の方法

本研究が行った具体的作業は、民族誌的フィールドワーク、資料の分析、及び理論的検討である。この内フィールドワークに関しては、ネパールでの調査（2016 年 7～8 月、2017 年 3 月、7～8 月、2018 年 8 月、2019 年 2～3 月、7～8 月）に加え、インド、ニューデリーでのインタビュー（2017 年 7 月）、及びネパールのランが多く移住しているアメリカにおける調査（2017 年 8～9 月、2019 年 9 月）を行った。平行して、関連するネパール語、ヒンディー語、ラン語（ビャンシー語）による各種資料の収集と分析を行った。理論面では、上記「研究開始当初の背景」で触れた 5 つの問題系に関する検討を、順次進めた。

なお、当初計画されていた極西部ネパールでの調査については、道路状況、同地における国境問題の再燃等の不可避的な事情により、期間内に行うことが出来なかったが、インタビュー、及び電子メディアを通じた情報収集等を行うことにより、その影響を最小限とすることが出来た。

４．研究成果

本研究が民族誌的に明らかにしたことを暫定的にまとめると、以下のようになる。

(1) ランの伝統的な居住地域は、過去 2 世紀以上にわたり、マハカリ川に沿ってインド、ネパール両国に分断されてきた。しかし、ランの人々はこの間国境を越えて新たな姻戚関係を結び続けてきており、またラン内部の文化的差異の分布が、国境線と全く関係していないことから、「ラン」という範疇自体にとって、国境の存在は重要な意味を持たない。このことは、以前の調査でも明らかにされていたが、本研究においても、この点に変化がないことが確認された。

(2) とはいえ、国境の存在は、個々のランにとって極めて重要なものとなり得る。何らかの事情で国境が閉鎖されると、生業や姻族との関係に即座に影響が出るランがかなりの数いるといったことばかりではない。国境のどちら側で生まれ育つかが、学校で用いる言語の選択範囲から、その後の人生経路に至るまでに、大きく影響するからである（ただし、多くのランの越冬地でもあった国境のバザールなどでは、国境の反対側の学校に通わせるといった、一定の対応は可能である）。
(3) 異なる国家の存在が、「ラン」という範疇自体と直接関係するのは、それぞれの国家のマイノリティ政策においてである。インドにおいて、ランは長年指定トライブの一部として扱われてきた。インド領のランの活動家達は、民族団体を設立して 25 年以上にわたり様々な活動を展開してきたが、今回の調査により、その活動が近年ますます活発化していることが明らかになった。ウッタラーカンド州やウッタルプラデーシュ州の幾つかの都市には民族団体の建物があり、2017 年には、デリーにも、デリー在住のランを中心に寄付を募って土地を買い、3 階建ての建物を建設した。こうした建物は、ランのランとしての諸活動の他、経済的に恵まれない若年層のランのためにも用いられるという。こうした活動を支えているのが、ホワイトカラー職に就くなどして経済的に成功したランである。どの都市でも圧倒的な少数者でしかあり得ないランが、「ラン」であることのみを根拠として、ランのために協働するという図式が、ここには見られる。
(4) ネパールにおいては、1990 年の民主化を機に少数民族の運動が盛んになり、先住民を巡る国際的な議論とも結びつく形で展開した。ネパールのランが自ら団体を作りこうした運動に参加したのは世紀の変わり目頃で、その後他の先住民団体との交流や社会文化事業などを行うようになっていった。
(5) 2015 年新憲法により、ネパールは 7 つの州からなる連邦国家となった。極西州では、民族運動にも深く関わっていたラン出身の実業家が州議会議員に当選した。一方、地方政治の基本単位であった行政村の大幅な統廃合により、ランを主な住民とする村のみからなる行政村は統廃合により皆無となったが、この点の影響は、今後中長期的に確認する必要がある。なお、行政村の下のワードの水準では、より若い世代のランが政治に進出するようになっている。
(6) インドとネパールのランの民族運動は、組織としては別個ではあるが、密接な関係を持ってきた。インドの民族団体が毎年各地を巡回して開催する大会がネパール領の村で行われた事例が、このことを端的に示している。
(7) アメリカ在住のランについては、最も定住者の多いボストン近郊での調査などから、以下のことが判明した。アメリカに移住するランの多くはネパール出身あるいはその配偶者である。このことは、インドのランが、インド各地の大都市に薄く広く移住し活躍していることと対象をなしている。アメリカのランは、共同で部屋を借りている場合等を除き原則としてばらばらに住んでいるが、儀礼等の機会には、出身村を問わず、「ラン」という枠組で集まることが多い。ただし、「ネパール人」といったより広い括り、また親族・姻族関係のようなより狭い関係性が、前景化する場合もあり、これらが錯綜する場合もある。例えば、あるアメリカ在住の若いランが、ランではない友人と共に、コロナ禍に伴う国境封鎖でインド領に取り残された人々への支援ファンドを立ち上げた時、支援対象は明らかに取り残されたネパール国民であったが、支援要請はランの親族ネットワークを通じても流れていっていた。

以上は研究成果のごくおおまかな要約に過ぎないが、4 年間にわたる研究により、ほぼ 2 世紀にわたり国境によって分断されてきた「ラン」の人々が、グローバルに流通する概念の影響、国家政策の変遷、さらには多くの成員の国内外各地への移住とコミュニケーションの増大といった現代的状況の中で、各々の生活世界との関係において、いかに、そしてどのような文脈で「ラン」として、或いは他の集団範疇の一員として生きるのかについて、現地調査と各種文献の検討から明らかにしたことの一端は示せたかと思う。インド及び極西部ネパールでの更なる調査を通じた、以上の暫定的な理解の検証と精緻化、及び、より抽象度の高い集団範疇に関する議論との関係におけるさらなる分析については、大部分今後の課題となる。その結果は、20 世紀半ばから 21 世紀に至る、国境によって分断された「民族」の動態の具体的な解明は、民族論、集団範疇論、国民国家論、グローバル化論等が交錯する現代的状況の解明のための、一つの重要な民族誌的手掛かりを呈示するものになると信じる。

<引用文献>

Comaroff, John L. and Jean Comaroff 2009 *Ethnicity, Inc*. The University of Chicago Press.
河合香吏編 2009 『集団−人類社会の進化』. 京都大学学術出版会.
河合香吏編 2013 『制度−人類社会の進化』. 京都大学学術出版会.
窪田幸子・野林厚志編 2009 『「先住民」とはだれか』. 世界思想社.
キムリッカ, ウィル 2012 『土着語の政治−ナショナリズム・多文化主義・シティズンシップ』. 法政大学出版局.
真島一郎 2006 「中間集団論−社会的なるものの起点から回帰へ」.『文化人類学』71(1): 24-49.
Moerman, Michael 1968 “Being Lue: uses and abuses of ethnic identification.” In June Helm (ed.) *Essays on the Problem of Tribe: Proceedings of the 1967 Annual Spring Meeting of the American Ethnological Society*, pp. 153–169. University of Washington Press,
名和克郎 1992 「民族論の発展のために−民族の記述と分析に関する理論的考察」. 『民族学研

究』 57(3): 297-317.
内堀基光 1989 「民族論メモランダム」. 田辺繁治編,『人類学的認識の冒険−イデオロギーとプラクティス』, pp. 27−43. 同文館.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 名和克郎	４．巻 84(4)
２．論文標題 序―「言語人類学」と「指標性」の概念をめぐって	５．発行年 2020年
３．雑誌名 文化人類学	６．最初と最後の頁 431-442
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.14890/jjcanth.84.4_431	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Nawa Katsuo	４．巻 0
２．論文標題 Effects of Translation on the Invisible Power Wielded by Language in the Legal Sphere: The Case of Nepal	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Meaning and Power in the Language of Law (Janny H. C. Leung, and Alan Durant eds.)	６．最初と最後の頁 95～117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.1017/9781316285756.005	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Katsuo Nawa	４．巻 47(1+2)
２．論文標題 Triangulating the Nation State through Translation: Some Reflections on "Nation", Ethnicity", "Religion" and "Language" in Modern Japan, Germany and Nepal	５．発行年 2016年
３．雑誌名 Internationales Asienforum/ International Quarterly for Asian Studies	６．最初と最後の頁 11-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.11588/iaf.2016.47.3659	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　6件／うち国際学会　12件）

１．発表者名 Katsuo Nawa
２．発表標題 Imaginary Journeys across Himalayas through Words: On Some Ritual Recitations in Byans, Far Western Nepal
３．学会等名 Traditions and Changes: The Second International Symposium on Himalayan Studies（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Katsuo Nawa
２．発表標題 Ambivalence Denied or Unrecognized? A Preliminary Study on Some Governmental Brochures in the Early Panchayat Period
３．学会等名 The Annual Kathmandu Conference on Nepal and the Himalaya 2018（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Katsuo Nawa
２．発表標題 Migration and the Changing nature of multilingualism among the people of Byans, Far Western Nepal and adjacent regions
３．学会等名 CASCA/IUAES2017 Conference in Ottawa: Mo(u)vement（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 名和克郎
２．発表標題 ネパールのランにおける毛織物をめぐる実践と表象の展開-「伝統服」と絨毯を例として
３．学会等名 日本文化人類学会第51回研究大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Katsuo Nawa
２．発表標題 ‘There Are No Servants among Us’: Livelihood, Work, and Being Independent among Rangs from Byans, Far Western Nepal
３．学会等名 International Conference "Work, Identity and Livelihood in Nepal: Theoretical challenges and contemporary practices for South Asia", South Asian University.（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Katsuo Nawa
２．発表標題 On the 'Drum Music' in Byans and Adjacent Regions: Performances, Aesthetics, and Boundaries
３．学会等名 5th ANHS Himalayan Studies Conference, University of Colorado Boulder（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Katsuo Nawa
２．発表標題 "Citizenship", "Religion", Patrilineality, and Imagined Communities in Contemporary Nepal: Comparing the Early Panchayat and Post-"Conflict" Periods
３．学会等名 Critical Nationalism Studies Workshop: National Imaginaries and Beyond, Durham University（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Katsuo Nawa
２．発表標題 Changing Discourse on Religion/Dharma among the Rangs of Byans, Far Western Nepal
３．学会等名 IUAES Inter-Congress 2016（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Katsuo Nawa
２．発表標題 Hope, Negation, and Becoming in Changing "Ethnic" Claims by People of Byans, Far Western Nepal
３．学会等名 AAS (Association for Asian Studies) in Asia, Kyoto 2016（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Katsuo Nawa
２．発表標題 Writing in 'Rang lwo' without orthography: Digital 'vernacular' communication and its limitations among the Rangs from far western Nepal and adjacent regions
３．学会等名 29th Annual Conference, Japanese Association for South Asian Studies（国際学会）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計1件

１．著者名 名和克郎（編）、石井溥、中川加奈子、森本泉、橋健一、藤倉達郎、佐藤斉華、田中雅子、高田洋平、丹羽充、別所裕介、南真木人、上杉妙子、宮本万里	４．発行年 2017年
２．出版社 三元社	５．総ページ数 xi+580
３．書名 体制転換期ネパールにおける「包摂」の諸相―言説政治・社会実践・生活世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考